

東京女子高等師範学校体育科における学びの実像

芹澤 良子

はじめに

本稿は、東京女子高等師範学校（以下、女高師と略称）の卒業生から語られた歴史（オーラル資料）をもとに、『お茶の水女子大学百年史⁽¹⁾（以下、『百年史』と略称）』には、つづられなかった教育の実態を明らかにすることを課題とする。

お茶の水女子大学、そして、その前身である女高師の授業カリキュラムや教官については、『百年史』においても、既紹介されている。一九八四年に刊行された『百年史』は、創設以来現在に至るまでの本校の歴史を示す基礎資料であるが、そこに記載されている内容は、官立学校としてどのような教育がなされ、何人の生徒が入学したのかなど、文部省への報告が義務付けられているような事柄が中心であった。それは、『百年史』の編纂者が教官を中心に組織としてのお茶の水女子大学に所属するひとびとであることや、『百年史』をつづる上で利用された史料の多くが「公文書」ないしは学校が作成した資料であるからと思われる。

これに対し、語られた歴史に基づくことにより、在校生の目からみた女高師の歴史を描き出すことができるのである。基礎的な資料となるのは、女高師卒業生からの聞き取り調査である。本調査を進める中で、数多く語られた話題の一つに、授業カリキュラム、及び、教官に関する事柄がある。女高師という「場」をかんがみれば、当然といえば当然のことであ

るが、その内容は『百年史』を凌駕するたいへん豊かなものであった。聞き取り調査を行うことにより、これまで知られていなかった受験の様子や、当時行われていたカリキュラムの一端が、それを受け止めた側から明らかとなった。すなわち、学生にとつての記憶と、大学史としてつづられる記憶には相違があることが、本調査において認識されたのである。

今回の聞き取り調査は、二〇〇四年二月から十月、及び二〇〇八年二月に十四名（内三名は手記・書面による）の卒業生に対して行った。女高師は数回の学科改編を行っているが、文科、理科、家事科、体育科と四つの学科が存在しており、家事科をのぞくすべての学科の卒業生からお話しを伺えた。その中で最も多かったのは、体育科の卒業生であった。そのため本稿では、『百年史』に記載された体育科の歴史と、卒業生によって語られた歴史を比較、整理することとする。この作業により、女高師体育科の教育実態を解明するとともに、卒業生の行動や考え方を今なお規律し、その心に響き続ける女高師における学びについて明らかにしたい。

一、記された東京女子高等師範学校

女高師に体育科が設けられたのは、一九三七年のことで、「優良ナル女子ノ体育科教員ヲ養成スルノ必要アル」ことが設立の理由であった。当時、男性体育教員を養成する機関として、東京高等師範学校に体育科が設置されていたが、女性教員については「養成機関ノ設ナキ為女子ノ体育運動指導上遺憾ノ点少ナカラザル」状況であった。このような背景もあり、女高師に体育科が設けられることとなったのである⁽²⁾。

『百年史』によれば体育科の創設は、小、中学校などにおける「体育重視」の傾向と関連するものであった。「女子高等師範学校規定」が三七年五月に改正され、翌六月に学生の募集が行われた。体育科の募集人員は約三〇名であり、選考を経て実際に一期生として入学した学生は二一名であった⁽³⁾。

表一は、体育科が新設された際のカリキュラムである。一七の学科から成り、さらに課程として細分化がなされている。『百年史』では、学科と課程、および、一週間の教授時間が示されており、体育と音楽という二つの分野を同時に学ぶことが、体育科の特徴であった点が指摘されている⁽⁴⁾。しかし、実際のところ誰が、どのような授業を受け持っていたのかなど、具体的な状況までは把握しえない。『百年史』は大学の学校史であり、よって、同誌に記された内容は大学が存在しうる根幹となる記述でまとめられているのである。それゆえ、大学の組織に関する事柄が中心となる。本共同研究の和田華子論文で指摘しているように、大学史といった文脈で学校史を整理した場合には、組織体としての大学に論旨が集約される可能性が高い。それは、学校という一つの組織の歴史を考えれば当然の帰結であるが、組織だけでは記せない学校の状況もある⁽⁵⁾。それは、学生の生活に直結する事柄といえる。

授業の受け手である学生たちにとっては大学の組織に関する事柄よりも、むしろどのような授業を受けたのか、そこから何を学んだのか、自らの学生生活を語るときのキーワードとなる。ゆえに、卒業生たちの聞き取りからは、授業や教官に関する事柄が、数多く語られているのであろう。卒業生にとって授業は、女高師生活の中で最も記憶に残りうる体験として心に刻みこまれているのである。

先述したように『百年史』につづられた女高師の歴史は、学校という組織、制度に関する内容に偏重していた。『百年史』に記された内容は実際のところ、女高師の歴史を語る上では一部に過ぎないのである。それは、今回の聞き取り調査によって得られた、入学試験や実際の授業内容からも明らかとなる。聞き取り調査によって得られた女高師の歴史は、恐らくは、『百年史』の補完以上の意味を持つものとなり得るだろう。以下、聞き取り調査によって得られた情報を基に、女高師の歴史をつづりたい。

二、語られた東京女子高等師範学校

(一) 入学試験に関する語り―体育と音楽の实地テスト―

当時の入学試験はどのように行われたのであろうか。入学試験に関しては、『百年史』に記述がなく、わたくしたちの疑問のひとつであった。卒業生の語りによれば、体育科の入試においては実技も行われた⁽⁶⁾。

入学試験の時点から、体育科の特徴ともいえる、体育と音楽の二つの方面から試験がなされている。体育の試験は、五〇メートル走のタイム、バスケット（ドリブル・ドリブルシュート）、ダンスのステップなどであった。音楽の試験は、ピアノ（課題曲と音階）、聴音に加え、文部省唱歌を歌うといったテストがなされた。体育と音楽、異なる二つの試験を受けなければならないことは、受験生にとっては難関であった。このような状況についてC氏は、「両方持っている人は少なかった」と語っている。両立の難しさは、入学後の学校生活の中でも繰り返し語られている。

(二) 何をどのように学んだのか―体育科の実践

C氏「わたし両方やらされて参ったの」。

D氏「入ってから音楽をやっていた人は体育ができなくて苦労した。逆に音楽をやっていた人は体育ができなくて苦労した。発声しながら号令やらなきゃならなくて大変だったり、バレエやった後の、ピアノが辛いし（中略）。やってみるとはつきりするからね。私の頃は入ってしまえば、つてところだったけどね」。

と、入学後の体育科の実践状況を振り返る。体育と音楽、一見異なる二つの分野を同時に行うのは容易ではない。しかし、「大変だった」といいつつも、彼女たちはこのカリキュラムをこなしてきたのである。⁽⁷⁾カリキュラムは、実際にどのような

に行われたのであろうか。

学内で行われた授業については、音楽に関する記憶が深く刻まれている傾向がある。ピアノや声楽といった実践授業は、教官と学生のマンツーマンによる授業が女高師では行われていたのである。

C氏「音楽は…」「」は引用者補足、以下同じ」先生がちゃんとひとりずつついている。(中略)いつも一対一」。

D氏「わたしはつい最近までピアノのレッスンの夢をみていたよ。一番最後まで見ていたのが、■■先生、辛かったんだねえ」。

C氏「レッスンが来るのが一週間に一回ぐらいだったね。私も嫌だったんだ。あれ」。

女高師には、ピアノのレッスン室が完備されており、学生たちは自習することも可能であった。女高師の学生は、基本的に寮生活を送ることとなっているが、体育科⁽⁸⁾の生徒は寮内で設けられた自習時間を活用し、ピアノの練習を行っていた。

C氏「夜八時から勉強の時間になるけど、暖房も入ってくるし、寮の八人部屋の人たちで一気に勉強をはじめの。それでも体育科だけは、本館へ行って電気をつけて」

D氏「ピアノが並んでいる」

C氏「寒いよ。ピアノの部屋。みんなの勉強が終わったら、鍵を閉めて、電気消して、自分のお部屋に戻っていった」。

D氏「そこはなかなか私達のようなのは行けないんだよ」。

と自宅生であった、D氏は語る。寮の自習時間にピアノの練習ができることは、寮生の特権のようである。

もう一つの主要科目である、体育については日常行われていた授業よりもむしろ、スキーや遠泳など移動授業についての記憶が残っているようである。C氏にとって、冬のスキー合宿はとりわけ印象深い出来事であった。

C氏「何よりもスキーでしょう。スキー。スキーはあれからわたし、ずっと今でもやっている」。「スキーは二、三年

の正課になって。志賀高原の寮は私たちがスキーをするからって作ってくれた。泊り込みでやっていた」。

D氏「わたしは一年しか出ませんでした。病気になっちゃったから、診断書を出してもらって行かなかった」。

C氏「行きたかったよね。いやあ、はじめはスキーなんてやったことがないから、こりごりだったんだけど。北海道の人、青森、長野、北陸の子は「やって」いたけど、あとは関東九州だったからやったことがない。ゲレンデなんかない」。

スキーは一部の学生を除いては、初めて体験することがらであった。

C氏「必ずシール「アザラシの毛のついた滑り止め」を買わされてつけさせられた。スキー「板」も靴も、全部自分で買わせられた。全部で十六円だったのを覚えている。山を登って目指すところへ行き、(中略)先生が「出発するぞ」っていうの。北海道「出身者」は行く、長野「出身者」も行くしね。我々は後ろのほうからついていった」。

このスキー体験は、C氏の生涯にとって重要な意味を持つ。

C氏「自分でやったことは身に付くね。女高師に行ってよかったなあと思うのは、そういうやったことのないことを経験させるってことね。上手でなくても経験することがいかに大事かってことがわかった。そうでなければスキーなんてやろうとは思わないもの」。

同じように、夏に行われた遠泳についても振り返る。遠泳は勝浦から鶴原まで十キロの距離を泳ごうというものであった。

C氏「若いときにこういう経験をさせてくれたっていうことは、ありがたいわね。私は、生徒がどれくらい伸びるかは卒業してからの努力もあるだろうけど、やらないことにはわからない。いろいろな経験させるところが学校だと思つづく思つた」。

C氏とD氏は、体育科の一期生であるが、三期生の方の聞き取り調査からも同様の体験談が語られた。三期生はアジア太平洋戦争期に、女高師に在学しているが、志賀高原におけるスキー合宿は一期生と同じように行われていた。また、一九四五年九月、臨時教員養成所家事体操科の卒業生からもスキー及び、遠泳についての思い出が語られている。臨時教員養成所は入学から卒業まで、二年半というカリキュラムである。また、H氏が在学していた期間は、戦局が激化している状況下であった。それにも関わらず、スキーと遠泳が行われているのである。

H氏「発哺の山小屋へ行きましたよ。志賀高原へ。昭和一八年の暮れか一九九年のお正月か、冬休みに冬季訓練として」。

また、遠泳についても、

H氏「十キロ。鯨波というところが合宿の地で、お寺だったのでしょうか。一年の夏だったと思います。鯨波から柏崎方面へ。十キロだったと思います。体育科と家体「家事体操科」が全員一緒に行きました。上級生も両科全員合宿をいたしました」。

当時の写真にH氏は次のように記していた。

H氏「『太平洋戦争にも関わらず、国立ゆえに、海洋訓練として新潟県鯨波へ合宿、体育科・家事体操科』と記しています。冬季合宿も訓練としてですね。『他大学にはきつとないだろうな。やっぱりこの学校だからかな』と先生が申されていました」。

このように、戦局が悪化した後も、訓練という名目でスキーや遠泳の合宿が継続しつづけたのである。

(三) 教員との思い出—あこがれ、目標、そしてよき理解者—

表二は、卒業生からの聞き取りをもとに作成した、教科と担当教官の一覧である。教授や助教授クラスの教官について

は、『百年史』においても若干触れられているが、体育科の教員の全体像を捉えることは難しい。体育と音楽を同時に学ぶことが体育科の特徴であるが、特に音楽の分野においては、横田（四谷）文子⁽¹⁰⁾に代表されるような、当時、屈指の芸術家が授業を担当していた。しかし、このような事柄は『百年史』には、記されていない。

F氏「女学生の頃から先生のレコードをたくさんあつめていて入学して横田文子先生が四谷文子先生とわかった時にはびっくりしてとてもうれしかった。四谷先生は教育的ない歌だけでなく、流行歌のレコードも沢山出しておられた」。

昼は授業を受け、時には、夜に教官のリサイタルに出かけている。

F氏「体育科の音楽の先生方のリサイタルは夜が多いので特別に九時迄「門限が」許可されたこともあったが、大体九時頃に会が終わるので最後までできず事が出来ず慌てて帰寮。体育科だけの特権だった」

と、寮には門限があったが、教官のリサイタルが開催されたときのみ、門限の延長が認められていた。

教官との思い出は、学生時代に留まらない。学生たちのその後の生活においても、教官との関わりは続いているのである。D氏のその後の生活において、心の支えとなったのは、声楽の教官、平井美奈⁽¹¹⁾がいった一言であった。

D氏「『Dさん、全部満足にしようと思ったら自分があれになっちゃうんだから。全部七割でいいのよって（後略）』ってそれだけ言われたの。全部できなくていいんだよって言うのは、いつも励まされたわけ」。

学生にとって教官はよき理解者であると同時に、また、よき相談相手であった。

F氏「戸倉「ハル」先生⁽¹²⁾に「相手の方が」私の行く先々に来ていらっしゃるんですけどね、相談したんだけど戸倉先生は学校はどこだ？と聞かれましたので一高、東大法学部ですと言ったら、いいからもう結婚しちゃいなさいって。そういうことになってしまった。（中略）私が片親だし（父上はF氏が三歳の時に死亡）、心配してくださってね。お母さんが心配しないようにとね。先生は独身を通されましたでしょ。寂しいときそばにいてくれた方がいいから

ね」と。

このように学生の結婚を後押しするケースもあった。戸倉ハルは、ほかにも就職先を学生に紹介するなど、卒業後も折にふれ学生たちの世話をしている。戸倉ハルを学生は「体育科のお母様」と慕い、そして、「(F氏) 戸倉先生の御恩にそむく様なことは出来ないとがんばりました」と語っている。

まとめにかえて―刻まれた東京女子高等師範学校の体験―

本聞き取り調査、とりわけ体育科の卒業生を対象とした調査は、複数の卒業生から行ったこともあり、多角的で重層的なものであった。それゆえ、『百年史』からはこぼれ落ちたものの、女高師を知る上では欠かすことのできないような事実を確認することができた。語られた歴史といった私的な領域からアプローチを図ることによって、女高師の歴史により深い理解が図られたといえよう。体育科という実践重視の専攻ゆえかもしれないが、女高師における体験が卒業生の人生において、有意義な体験であるとの語りが多く聞かれた。このことをつづり、まとめとしたい。

C氏「女高師に行ってよかったなと思うのは、そういうやったことないことを、経験させるってことね。上手でなくても経験することがいかに大切かってことがわかった」。

また、D氏も日ごろ通うデイサービスの中での様子をおりませて、

D氏「ピアノを使つて」じゃんじゃんじゃん。ぱんぱんぱんぱんと、あなた伴奏だよじゃんじゃんって、楽しい遊び方できないかな、そういう考え方をしている訳。それから指導者作るわけなし。これ使つて楽しもうよ、遊ぼうよ、そういうお手伝いができたらなあって私は思っているの。歌でもね、私はいろんな歌が、歌えるのよ。おかげさまでいろんな歌、歌ってきたから。民謡だろうがなんだろうが、ある程度すぐ、覚えられるから。譜面をし

っているから。(中略) みんなで遊ぼうよって幼稚園生になれるかってこと。そうすると周りも少し元気になれる(後略)」。)

彼女たちの女高師体験は、身と心に刻まれ、生き方そのものに反映されることとなったのである。そして、その経験は、彼女たちを通じて多くの人たちに伝わっているであろう。

注

- (1) 『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会、一九八四年。
- (2) 「文部大臣請議文部省直轄諸学校職員定員令中改正ノ件」〔公文類聚第六十一編卷十官職門八官制八文部省二止〕国立公文書館所蔵 請求番号・類一〇二〇一三一〇〇〇)
- (3) 『お茶の水女子大学百年史』一八三〜一八四頁。
- (4) 同右一八四〜一八五頁、五六八頁。
- (5) 和田華子「大学史資料としてのオーラルヒストリー」『お茶の水史学』第五一号、二〇〇八年。
- (6) 入試に関する出身校の教員たちの状況については大江論文に譲るが、女高師に学生を入学させるということは、出身校にとっても名誉なことであった。
- (7) このようなカリキュラムの結果、体育と音楽と二つの教養を身につけた教師となった。J氏はダンスの授業において即興で演奏し、生徒の動きに対応した。J氏の語りにより体育と音楽の二つを学ぶことの意味が確認できた。それが最も調和する授業はダンスだったのである。
- (8) 一、二年生は全員入寮。三年次以降は一時間以内で通学できる学生のみ、自宅からの通学が認められた。
- (9) 遠征が行われたのは、特記すべき状況といえるが、東京よりも、むしろ、長野や新潟といった場所の方が授業を行う上では、状況がよかったのかも知れない。
- (10) アルト歌手。クラシック、外国ポピュラー、日本の歌謡曲まで幅広いジャンルで活躍した。戦後は、東京音楽大学、国立音楽大学(名誉教授)で学生の指導をおこなった(『ポピュラー音楽人名事典』『日外アソシエーツ』一九九四年、『標準音楽辞典』音楽之友社、一九九六年)。
- (11) ソプラノ歌手。東京学芸大学名誉教授、上野学園大学名誉教授(『新訂音楽家人名辞典』日外アソシエーツ、一

九九六年)。

(12) 女高師教授、戦後、お茶の水女子大学教授(名誉教授)。
ダンスを専門とし、日本女子体育の先駆者(佐々木等編
『近世日本女子体育教育・スポーツ発展史』二階堂学園、
一九七一年、二一五頁)。

*このような貴重な体験談をお話くださいました、先輩方に
調査者一同深く感謝を申し上げます。

表1 1937年(昭和12年)度体育科のカリキュラム

| 学科 | 課程 |
|------------|--|
| 修身 | 修養論・教育ニ関スル勅語・戊申詔書及国民精神作興ニ関スル詔書ノ述義・国民道德論・倫理学・法制及経済・作法 |
| 教育 | 心理学・論理学・教育学・教育史・教授法・保育法・教育法令及学校管理法・学校衛生・教育実習 |
| 体育概論 | 体育史・体育総論 |
| 体操及遊戯 | 体操・教練・唱歌遊戯・行進遊戯 |
| 競技及武道 | 走 跳 投・籠球・排球・手球・水泳・弓道・薙刀 |
| 生理衛生及運動医学 | 生理学・解剖学・衛生学・運動医学 |
| 生物学通論 | 生物学大意 |
| 育児看護 | 育児看護大意 |
| 栄養学 | 栄養学大意 |
| 音楽理論 | 楽典・対位法・楽式・作曲・指揮 |
| 声乐 | 独唱・合唱 |
| 器楽 | ピアノ |
| 音楽史 | 日本音楽史・西洋音楽史 |
| 和声学 | 和声学大意 |
| 国語 | 講読・作歌 |
| 美学 | 美学大意 |
| 外国語(独語、英語) | 購読・文法・作文 |

出典)『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会、1984年、184頁転記。

表2 聞き取りの中で語られた教科と担当教官

| 教科 | 教官 |
|-----------|-------------------------|
| 校長 | 下村寿一 |
| 英語 | 津田芳雄 |
| 音楽史・楽典・理論 | 小松耕輔 |
| 器械体操 | 森悌次郎 |
| 教育学 | 倉沢剛 |
| 教練 | 松本千代栄 |
| 国語 | 金子彦二郎 石川謙 |
| 作法 | 岡ハツノ |
| 書道 | 尾上柴舟 |
| 水泳 | 竹之下休蔵 戸名正子 |
| 声楽 | 平井美奈 四谷文子 奥田良三 加古三枝子 |
| 心理学 | 菅原教造 |
| 体育原理 | 佐々木等 |
| ダンス | 戸倉ハル 北原婦美子 |
| 薙刀 | 山内禎子 |
| 球技 | 石山平作 |
| ピアノ | 宅孝二 豊増 昇 遠見豊子 山田 (名前不明) |
| 倫理 | 勝部真長 |

出典) 卒業生の聞き取りをもとに作成。